

社団法人日本生理学会次期会長最終候補者選出選挙

第2回投票 候補者

推薦書
学会運営抱負
研究教育活動概要
略歴

(候補者の50音順)

平成 22 年 12 月 24 日

日本生理学会・会長 岡田泰伸 殿

日本生理学会次期会長第二次候補者 推薦書

日本生理学会次期会長候補者推薦委員会は、慎重審議の結果、次期会長第二次候補者として京都大学医学研究科脳統御医科学専攻高次脳科学講座・神経生物学領域 教授、大森 治紀先生を推薦することに決定いたしました。

大森先生は、研究面では、イオンチャネルの解析、特に聴覚中枢の特徴抽出回路の詳細な生理学的解析において先駆的な業績を数多く挙げられており、この分野の世界的な権威として第一線でご活躍中であります。教育面では、特に大学院教育の実質化を目指した改革推進プログラムに携わられるとともに、特定領域研究の代表者として若手生理学研究者の育成に情熱を持って尽力されておられます。日本生理学会においては、長年、常任幹事として学会運営全般にわたり多大な貢献をされておられます。学術研究委員会委員長、賞選考委員会委員長を努められ、生理学研究および教育の後継者養成に取り組んでこられました。また、国際交流委員会委員長として生理学会大会における口演発表の英語化に取り組み、外国人参加者の増加など国際化の推進に尽力されました。2009 年開催の IUPS 大会では国際対応委員会委員長として、これらの成果をもとに大会を成功に導かれたことは高く評価されます。さらに、日本神経科学学会、日本生物物理学会等においても重責を担われており、関連分野との連携を図る上でも適任であります。このように、これまでの業績・経験・実績を鑑みて、次期日本生理学会会長にふさわしいと考えます。

日本生理学会次期会長候補者推薦委員会

昨年末に群馬大学の白尾先生から電話を頂き、生理学会次期会長候補に私を推薦したいとのことでした。その後何名かの先生方も推薦者に加わられた様子です。私は生理学会には、20代の前半からかれこれ40年近く育てて頂いた恩があります。しかし一方では、私も数年先には京都大学を定年になりますので、残された何年かの時間は、今一緒に研究している人たちが1人でも多く世の中に羽ばたけるように手伝い、私自身も研究に専念したいと思っています。それでも一方では、多くの人が私の背中を押してくれるのならやはり生理学会の為に働かなくてはならないかなとも思い、矛盾した気持ちが今の偽らない心です。

そうした矛盾した立場から、

学会運営に関しましては、今は次のように考えています。

生理学会にとって、とても大事なことは、年大会が国際化し、他学会からも自然な形で参加されるような活気のある学会となる事と思っています。

日本生理学会は一昨年のIUPS京都大会を成功させる為に国際化を目指し、その過程で学会発表の英語化を進めてきました。IUPS大会は成功裏に終了しましたが、年大会の国際化の路線は今後も進めるべきでしょう。しかし、こうした英語化・国際化に伴い年大会の運営の形は変わり、大学院生、ポストドックあるいは若手の教員が生理学会年大会で口頭発表をする機会は昔に比べて減っています。口頭発表の機会は、地方会で提供し補うことが当面の現実的な解決策と思います。次に、もう一つ欠かせない事は学際化の流れです。今回の解剖学会、そして以前の薬理学会の様に機会を捉えて年大会を共同開催する事と共に、日常的には他学会からの提供あるいは共催シンポジウムを生理学会年大会で実施することで、生理学会を他学会の先生方にも見て頂き、同時に他学会の優れた研究に学ぶ機会を、身近に持つべきでしょう。そして、学際化を通じて生理学会がより活発になり、国際化を通じて近隣諸国を中心にエネルギーのある若手の研究者、ポストドック、大学院生などが1人でも多く、日本生理学会大会を目指してくれるような学会にしたいものです。

しかし、大会運営の工夫あるいは会長1人の力では、生理学会は元気にはならないでしょう。生理学そして生理学会が元気になることは、1人1人の生理学会会員の力にかかっています。具体的には、1人1人の生理学会会員が、今ご自身に出来る事で生理学会に活力を与えることがおそらく唯一の方策と思います。生理学は、長い歴史の中で、生命の不思議を目の前にして様々な創意と工夫を重ね、謎を解き明かしてきた学問です。ある意味では、生理学者個人の知を中心とした学問領域であり、今風のマスによる力の学問領域ではありません。したがって生理学研究が国家プロジェクトとして支援を受ける機会は少ないかもしれませんが、生理学者個人の研究室の中で、目の前の研究を一工夫、二工夫する事から、新しい展開を進める事のできる学問分野であると思います。同じ生理学研究をしながらも、一皮むけた、工夫のある研究を進めることが、学会会場での驚きと賞賛と活力を生み、教育の場では、学問への情熱を学生諸君に伝えることになるのではないのでしょうか。そして、1人でも2人でも、学生諸君が生理学研究を志すような熱気を生理学と生理学会にもたらすことになるのではないのでしょうか。日本生理学会の1人の会員として、私は会員1人1人の努力と創造力が生理学と生理学会の未来をもたらすものと確信しています。

研究活動概要

1. イオンチャネルの研究 (医学部学生、大学院院生、高橋國太郎先生 宮崎俊一先生に師事)
学生時代に宮崎先生が行っていたヒトデ卵細胞の膜興奮性の研究を見て私の生理学研究は始まりました。その後は高橋先生のご指導で、ホヤ幼生神経筋接合部シナプスの発達(佐々木成人先生)、ホヤ未受精卵での表面電荷のチャネルゲート作用(吉井光信先生)、内向整流性 K チャネルおよび Na チャネルの電流雑音解析などを通して、電気生理学の手技と基本を学ぶと共に、表面陰性電荷分布密度とイオンチャネル作用、イオンのチャネル修飾作用、単一チャネル電流、チャネル分布密度など細胞膜の興奮性に関する幾つかの要素機構を明らかにしました。
2. シナプス可塑性個体発達の研究 (ポストドック、E Kandel 先生に師事)
体重数 mg の幼若個体から 300 g 強の成体に至るアフリジアの発達過程で、腹腔神経節シナプス可塑性を研究し、PTP が個体発達に伴い増強される所見を得ました。
3. イオンチャネルのパッチクランプ研究 (ポストドック、萩原生長先生に師事)
K チャネル、Ca チャネルにパッチクランプ法を適用し単一電流記録、全細胞電流記録の実験手技を確立しました。
4. 有毛細胞機能の研究 (東大脳研究施設 生理学研究所 京大医学部・医学研究科)
米国留学から帰国後、ヒヨコ内耳から急性単離した有毛細胞を用いて全細胞記録を行い、膜興奮特性、機械受容器チャネルのゲート特性を様々な側面から明らかにしました。さらに、初代培養の小脳顆粒細胞を検出系として用い、有毛細胞がグルタミン酸を伝達物質として放出することを明らかにしました。
5. 聴覚神経回路機構の研究 (京都大学医学部・医学研究科)
現在の主な研究は、ヒヨコ脳幹切片を標本として、聴覚神経核諸核における音情報の特徴抽出および音の左右差の処理に関わる神経回路の機能を、シナプスとイオンチャネルそして神経細胞の興奮性という要素的な視点から研究しています。さらに、動物個体脳を標本として、左右両耳間での時間差情報および音圧差情報が、音の強さと位相差の影響を相互に受けて適応し統合され精緻に処理される神経回路機構を研究しています。

教育活動概要

1. 京大医学部において生理学の講義と実習、神経科学では聴覚生理学の講義、非常勤講師としても幾つかの大学で、聴覚生理学の講義を行っています。
2. 標準生理学(医学書院)の編集(第6, 7版) および第4章(III)聴覚を執筆(第5・7版)。
3. ほか、文部科学省の大学院教育改革プログラム委員など。

日本生理学会次期会長候補略歴

ふりがな	おおもり はるのり		生年月日	1950年 3月 11日	
氏名	大森 治紀				
勤務機関	京都大学		職名	教授	
学歴	東京大学		医学部		学位
	1974年 9月 30日 卒業				医学博士
	東京大学大学院				
	1979年 3月 29日 卒業				
職歴	1979年-1985年 東京大学医学部脳研究所 助手				
	この間1979-1980 米国 コロンビア大学医学部留学 (Kandel 教授)				
	1980-1982 米国 カリフォルニア大学医学部留学 (Hagiwara 教授)				
	1985年-1991年 岡崎国立共同研究機構生理学研究所 教授				
	1991年から 京都大学医学部(医学研究科) 教授				
研究歴	研究事項	イオンチャネルの研究			
	従事した期間	1974年-1979年			
	従事した機関名	東京大学大学院(医学部脳研究施設)			
	研究事項				
	従事した期間				
	従事した機関名				
	研究事項				
	従事した期間				
	従事した機関名				
	研究事項				
学会活動歴	生理学会における 役員歴	1999年 3月 - 2006年3月 常任幹事			
		2008年 3月 - 現在まで 常任幹事			
		1999年 3月 - 2008年3月 学術研究委員会 委員			
		2002年 3月 - 2004年6月 同 委員長			
		2004年 6月 - 現在まで 国際交流委員会 委員長			
		2008年 3月 - 2010年5月 賞選考委員会 委員長			
		2000年10月 - 2009年12月 IUPS 組織委員会 委員			
		2004年 6月 - 2009年12月 IUPS プログラム委員会 委員			
		1999年 3月 - 2008年3月 JPS編集委員会 委員			
		2001年 3月 - 2001年3月 第78回日本生理学会 当番幹事			
	生理学会以外の 学会及び団体の 役員歴	年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
		年 月 - 年 月			
年 月 - 年 月					
賞罰	年 月 なし				

平成 22 年 12 月 24 日

日本生理学会・会長 岡田泰伸 殿

日本生理学会次期会長第二次候補者 推薦書

日本生理学会次期会長候補者推薦委員会は、慎重審議の結果、次期日本生理学会会長第二次候補者として、東京慈恵会医科大学・細胞生理学講座教授、栗原 敏 先生を推薦することに決定いたしました。

栗原先生は、研究面では、筋の興奮収縮連関と心筋の収縮制御機構を専門とされ、我が国の筋肉生理学研究の第一人者としてリーダーシップを発揮されてこられました。また、教育面においては、医学あるいは歯学の学部教育の中で生理学をどのように位置づけるかという生理学教育の在り方に加え、大学院における高度専門教育や生理学教育・研究の後継者養成に将来展望と情熱を持って取り組んでおられ、本学会の教育委員長を務められたこともあります。さらに、栗原先生は、管理能力に長けておられ、長年、東京慈恵会医科大学の学長として大学運営に携わるとともに、本学会では、これまで会計幹事、常任幹事として、学会運営など多岐にわたり多大な貢献をされてこられました。IUPS2009 大会では財務委員長を担当され大会を成功に導かれました。2011 年 3 月には、第 88 回日本生理学会大会の会長代表として、日本解剖学会との合同大会を開催されます。現在、日本宇宙航空環境医学会理事長、日本体力医学会理事でもあり、生理学会と関連分野との連携を図る上でも適任であります。このように、これまでの経験・実績を鑑みて、次期日本生理学会会長にふさわしいと考えます。

日本生理学会次期会長候補者推薦委員会

日本生理学会次期会長候補者にご推挙いただき光栄です。私が日ごろ考えているところと私の立場をご説明したいと思います。

昭和 62 年に教育委員に就任して以来、日本生理学会の運営に関与してきました。当時から、日本生理学会の活性化と振興、役員選任規定の改定、会員の増加策、財政の安定化、地方会の活性化、周辺学会との交流、生理学後継者の育成、科学研究費の増額と分科・細目の検討、国際交流と学会の国際化への取り組み、国際生理学会の開催、動物実験の指針、生理学教育のあり方、研究倫理などが検討すべき課題となり、今日に至っています。最近では、法人化問題が大きな問題として浮上し対応を迫られています。

第 36 回国際生理学会世界大会は会員皆様のご協力を得て、盛会のうちに終わることができました。一つの大きな事業を成し遂げる力が日本生理学会にあることを示すことができました。それに続いて日本生理学会の活性化を図ることが目標ですが、取り組まなくてはならない問題が山積しています。

日本生理学会は生命科学の基盤となる重要な学会ですが、最近、学会員が増えず、日本生理学会大会参加者も減少傾向にあり、今後の学会運営、大会運営は容易ではないと認識しています。

日本生理学会は生命の機能に興味を持っている会員が集い、研究結果を発表・討論し、研究を更に推進する場として重要な役割を担ってきました。生理学の研究は多様化し、従来の研究方法だけでなく様々な研究方法が採り入れられるようになりました。それだけに、学際的な研究が必要とされます。また、分析的な研究に加えて、統合的な視点での研究を推進することが、生命の機能を解明する上で不可欠になっています。日本生理学会は最新の情報を会員に配信すると共に、学会員が参加したいと思う魅力ある大会の開催、国内の諸学会とのコラボレーション、国際的な視点での学会運営が求められていると思います。

すでに、将来計画委員会が提案していますが、日本生理学会大会では、臨床の学会を含めた他学会とのコラボレーションを推進し、日本生理学会のプレゼンスをもっとアピールすることに努めることが重要です。学会大会の共同主催はいろいろ乗り越えなくてはならない問題があるので、共同でシンポジウムを開催したり、他学会の方を講演者として招待するなどして、コラボレーションを図ってはどうかと考えます。また、日中韓シンポジウムが開催されていますが、それを発展させること、他国の生理学会と共同で学会大会の開催を計画することなども考えるべきだと思います。FAOPS はその一環として、8 年後に日本で開催されることになっていますが、若手研究者が中心となって企画して、アジアの生理学研究の中心的役割を果たせるよう、日本生理学会の事業の目標の一つとなるものと考えています。

生理学は医歯薬学部だけでなく、多くの学部の基幹科目として教育上重要です。先端的な研究成果の発表だけでなく、現在、教育委員会が企画しているモデル講義を広げるなどして、生理学に関心のある方が参加できる大会運営を推進することによって、会員を増やす努力をすることも大切です。もちろん、考慮すべき問題は多いと思いますが、推進すべきだと思います。

現在、日本生理学会の財務は余裕があるとはいえません。機関誌、JPS の発行も、文部科学省からの補助がなければ難しくなっています。私が財務担当の常任幹事をお引き受けしたときに、賛助会員制度を立ち上げました。当時、40 口を越える賛助会費収入がありましたが、不況の影響などで減りつつあります。企業の協力を得るためには、企業メリットを考える必要があります。健全な産学の協力を視野に入れて、恒常的な支援を得られるように努力すべきと考えています。

最後に私の個人的な心情を述べさせていただきます。次期日本生理学会会長候補に推挙されましたが、現在、私の大学における職務を考えると、会長が務まるのかという不安があります。他方、副会長、その他の方々の補佐を得られれば何とか職責を果たせるかという気持ちもあります。それが偽らざるところです。

研究活動概要

(1) 平滑筋の研究

候補者は1971年3月、東京慈恵会医科大学を卒業後、第二生理学教室に助手として入室し酒井敏夫教授のご指導を受けることになりました。学生時代から第二生理学教室でガマの膀胱平滑筋を対象として、溶液を急速に低下させると(急速冷却)筋が収縮する(急速冷却拘縮)ことを観察していたので、平滑筋の研究をやることになりました。電気生理学的手法を学ぶために、九州大学歯学部生理学教室の栗山熙教授のところへ8ヶ月間国内留学しました。栗山先生の下で、モルモット膀胱平滑筋細胞内にガラス微小電極を刺入して膜電位を測定し、膜電位に起電性Na-Kポンプが関与していること、冷却によって膜抵抗が著しく増加することを見出しました。慈恵医大第二生理学教室に復帰後は、モルモット膀胱平滑筋に対するプロカインの作用を調べ、プロカインは K^+ コンダクタンスを低下させて膜を脱分極させ、自発的活動電位の発火頻度を高めることを見つけました。

(2) 心筋の急速冷却拘縮に関する研究

温血動物心筋の研究に興味を持ち、モルモットの右室乳頭筋を使って、骨格筋と同じように急速冷却拘縮が起こるか調べました。骨格筋では拘縮を起こさないごく少量のカフェイン(0.5-1mM程度)を予め筋に作用させてから急速冷却すると最大張力に近い収縮が発生します。温血動物心筋では、カフェインの投与なしに急冷ただけで収縮が起こります。また、高濃度KCl溶液に浸漬して膜電位が0mVであっても急冷により拘縮がおこるので、急速冷却拘縮は膜電位変化によらない収縮で、急冷によって筋小胞体から直接放出される Ca^{2+} によって収縮が誘起されるものと考えました。心筋の急冷拘縮は急冷前に電気刺激をして刺激停止直後の急冷では大きな拘縮が観察されますが、刺激停止から急冷までの時間が長くなると拘縮高は減少します。また、急冷前の刺激頻度にも依存して変化します。これらのことなどから、急冷拘縮は筋小胞体に貯蔵されている Ca^{2+} 量を反映しているものと考えました。その後、サポニン処理したスキンド標本で急冷によって筋小胞体の含有 Ca^{2+} の約40%が放出されることが分かりました。

(3) 細胞内 Ca^{2+} 濃度測定法を用いた心筋、骨格筋の研究

細胞内 Ca^{2+} 濃度の測定は細胞の生理機能の理解に必須です。University College Londonの生理学教室に留学中、発光蛋白イクオリンを温血動物心筋細胞内に注入し、 Ca^{2+} transient と収縮を同時に記録することに成功しました。 Ca^{2+} transient と張力を同時測定することによって、細胞内 Ca^{2+} ホメオスタシス、収縮蛋白系の Ca^{2+} 感受性変化などを明らかにすることができるようになりました。フランク・スターリングの心臓の法則のメカニズムの解明に取り組み、 Ca^{2+} 感受性変化が大きな役割を果たしていることが分かりました。収縮制御蛋白トロポニン α は、筋長よりも張力に依存して Ca^{2+} 結合能が変化し、収縮を調節していることが明らかになりました。帰国後も継続してこの研究に取り組み、心筋に強縮を誘起して、張力発生時に急速に筋長を短縮させて、張力変化と細胞内 Ca^{2+} 濃度変化との対応を分析して証明しました。また、心筋に対する受容体刺激薬の作用メカニズムを、イクオリン法を用いて解明しました。受容体刺激は筋小胞体における Ca^{2+} 放出と取り込みを促進し、収縮を増強するとともに、収縮蛋白系の Ca^{2+} 感受性を低下させることを示しました。

また、急冷によって筋小胞体から Ca^{2+} が放出され細胞内 Ca^{2+} 濃度が増加することを定量的に示しました。蛙の単一骨格筋線維を用いて、細胞内にイクオリンを注入し、骨格筋におけるカフェイン作用時と急速冷却時の細胞内 Ca^{2+} 濃度を測定し、急速冷却によって細胞内 Ca^{2+} 濃度は3相に増加し、第2相が急速冷却拘縮と関係が深いことを示しました。また、カフェインの単収縮増強効果は Ca^{2+} transientのピークの増加を伴わず、必ずしも筋小胞体からの Ca^{2+} 放出の増加によるものでないことを明らかにしました。同様に、温血動物心室筋における急速冷却時の細胞内 Ca^{2+} 濃度を定量化しました。

(4) 病態生理学的研究

病態生理学の視点からも研究を進めました。アシドーシスでは心筋の Ca^{2+} 感受性が低下すること、糖尿病や甲状腺機能異常のモデルラットを作成して、細胞内 Ca^{2+} の調節異常と Ca^{2+} 感受性変化を明らかにしました。単一心筋細胞を分離し、蛍光 Ca^{2+} 指示薬やpH指示薬を細胞内に導入して、アシドーシスやアルカローシスにおける、収縮変化の細胞内メカニズムを明らかにしました。最近では、拡張型心筋症のモデルマウスの心筋を対象として、死亡因子の探索に努めています。

教育活動概要

東京慈恵会医科大学医学科、看護学科、慈恵看護専門学校で、生理学の講義を担当しました。医学科では自律神経系、循環、呼吸、消化吸收、生殖、内分泌の講義を担当してきました。また、看護学科、看護専門学校では植物機能を中心に生理学全般の基礎を講義してきました。医学科では、生理学演習・実習を担当し、血液、腎機能、呼吸機能、循環に関する実習指導にあたってきました。また、医学研究科大学院博士課程、看護学専攻修士課程でも、研究について講義をするとともに、医学研究科大学院博士課程の大学院生を受け入れ、研究指導してきました。

東京慈恵会医科大学のティーチャーズトレーニングを受講し、永年にわたりこのコースの実行委員を務めました。また、教学委員長として東京慈恵会医科大学教育の改善に努めました。

日本生理学会の教育委員として、生理学教育のあり方を検討し、生理学実習書、生理学用語集の編纂に従事しました。また、生理学研究所主催の夏季トレーニングコースの立ち上げに協力し、実習に参加しました。

大分大学医学部、山口大学医学部、京都大学医学部、大阪大学大学院などで非常勤講師として講義を担当しました。

日本生理学会次期会長候補略歴

ふりがな	くりはら さとし		生年月日	昭和21年 6月28日	
氏名	栗原 敏				
勤務機関	東京慈恵会医科大学		職名	理事長・学長・教授	
学歴	東京慈恵会医科大学		医学部		学位
	昭和46年 3月 31日		卒業		医学博士
	大学院				
	年 月 日		卒業 修了 中退		
職歴	昭和46年 4月 1日	東京慈恵会医科大学第二生理学教室助手			
	昭和46年 6月18日	第51回医師国家試験合格:医籍登録番号第210442号			
	昭和51年 5月24日	医学博士の学位受領			
	昭和51年 8月 1日	東京慈恵会医科大学第二生理学教室講師			
	昭和53年1月12日	英国University College Londonの生理学教室に留学			
	昭和54年10月22日	米国Mayo Clinicの薬理学教室に留学(昭和55年1月帰国)			
	昭和55年 7月1日	東京慈恵会医科大学第二生理学教室助教授			
	昭和61年 4月1日	東京慈恵会医科大学第二生理学教室(名称変更;細胞生理学講座)教授(現在に至る)			
	平成4年4月1日	東京慈恵会医科大学医学部看護学科兼任教授(現在に至る)			
	平成13年1月1日	東京慈恵会医科大学学長(現在に至る)			
	平成13年4月1日	東京慈恵会医科大学看護学科長(平成20年3月迄)			
	平成15年8月1日	学校法人慈恵大学理事長(現在に至る)			
研究歴	研究事項	モルモット膀胱平滑筋の電気生理学的研究			
	従事した期間	昭和46年5月 - 昭和46年12月			
	従事した機関名	九州大学歯学部生理学教室			
	研究事項	モルモット膀胱平滑および心筋の興奮収縮連関に関する研究			
	従事した期間	昭和47年1月 - 昭和52年12月			
	従事した機関名	東京慈恵会医科大学			
	研究事項	蛙骨格筋、温血動物心筋におけるイクオリンによる細胞内Ca ²⁺ 測定			
	従事した期間	昭和53年1月 - 昭和54年12月			
	従事した機関名	英国University College London生理学教室、米国Mayo Clinic薬理学教室			
学会活動歴	生理学会における 役員歴	昭51年6月-	評議員(現在に至る)		
		昭62年4月-	平11年3月 教育委員会委員		
		平 2年4月-	平 5年 3月 動物実験委員会委員		
		平 5年2月-	平14年 3月 常任幹事		
		平 5年4月-	平 8年 3月 教育委員会委員長		
		平 5年4月-	平16年 3月 国際交流委員会委員		
		平 8年4月-	平14年 3月 会則委員会委員		
		平 8年4月-	平14年 3月 将来計画委員会委員		
		平 8年4月-	平20年 3月 会計幹事		
		平 9年4月-	平13年 3月 Japanese Journal of Physiology編集委員会委員		
		平11年4月-	平22年 3月 IUPS組織委員会委員		
		平22年4月-	第88回日本生理学会大会会長(現在に至る)		
	生理学会以外の 学会及び団体の 役員歴	昭58年 1月-	日本体力医学会評議員(現在に至る)		
		昭58年 4月-	日本体力医学会理事(現在に至る)		
		平元年 8月-	平 9年 7月 東京都スポーツ振興審議会委員		
		平 2年 5月-	財団法人日本心臓血圧研究振興会理事・評議員(現在に至る)		
		平 3年10月-	平15年10月 日本学術会議第7部会体力科学研究連絡委員		
		平 6年 4月-	国際心臓研究学会日本部会評議員・理事(現在に至る)		
		平 8年 1月-	日本病態生理学会理事(現在に至る)		
		平 8年 4月-	平10年3月 財団法人日本心臓財団選考委員		
		平 9年 1月-	日本適応医学会評議員(現在に至る)		
平 9年 5月-		平13年5月 岡崎国立共同研究機構生理学研究所運営協議員			
平 9年10月-		平15年10月 日本学術会議第7部会生理学研究連絡委員会委員			
平 9年11月-		日本宇宙航空環境医学会理事(現在に至る)			
平10年 7月-		日本平滑筋学会評議員(現在に至る)			
平13年 6月-		平16年 3月 岡崎国立共同研究機構評議員			
平13年 6月-		平16年 3月 岡崎国立共同研究機構生理学研究所評議員			
平15年 4月-		財団法人医学教育振興財団 理事・評議員(現在に至る)			
平16年 4月-		平20年 3月 大学共同利用機関法人自然科学研究機構経営協議会委員			
平17年11月-		社団法人日本私立医科大学協会副会長(研究教育担当)(現在に至る)			
平18年 6月-		日本適応医学会理事(現在に至る)			
平18年 8月-	日本学術会議連携会員(現在に至る)				
平18年11月-	日本宇宙航空環境医学会理事長(現在に至る)				
平19年 6月-	国立大学法人評価委員会専門委員(現在に至る)				
平21年 3月-	宇宙航空研究開発機構人間を対象とする研究開発倫理審査委員会委員(現在に至る)				
賞 罰	なし				